



## 【信仰の母がいる家庭の祝福】

聖書本文:ルツ記1章11-18節/ 暗唱聖句:ルツ記2章12節

説教者:鄭南哲牧師  
(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの神の家族のみなさん、今年も母の感謝主日を迎えました！いつも日頃家族と子どもたちのために、主の教会の家族のためにも愛と犠牲を惜みず払い、献身的に仕えて下さっているお母さん方々の存在と愛の労苦に心から頭が下がり、感謝と尊敬を表します。

そして、お母さん方々の上にいつも全能なる神の御手があり、神の大いなる慰めと豊かな祝福が今年中にも満ち溢れまじすようにお祈り申し上げます。5月は大型GW期間、子どもの日、母の日など家庭の月だとも呼ばれています。我らの家庭は創造主の神様が人に与えて下さった一番最高の祝福であり、贈り物であると信じます。ところが、今日の多くの家庭がいろんな問題によって悩んだり、苦しんだり、崩れてしまっているのを我々はよく知っています。特にコロナ禍になってから、家庭の中の問題がさらに深刻になって来ていますが、みなさんの家庭はいかがでしょう。どうすれば、混乱な時代、我が家族、家庭が守られ、さらに祝福されていけるでしょうか。

今日、聖書の本文には経済的にとても苦しみ続きかなり貧しかったある家庭、それだけではなく、家族が次々と亡くなってしまいう耐え難い悲劇と悲しみを経験したあるお母さんの家族の話が記録されています。貧しい中で、次々の悲劇を経験し、世間の人々の基準で見れば、絶対不幸な家庭になりしかたない家庭でした。その家庭のお母さん(しゅうとめ)名前はナオミであって、一緒に暮らしていた二人の嫁ルツと弟嫁オルパの家庭でした。どうやって悲しみと苦しみ逆境を乗り越えて祝福され、用いられたのか一緒に学ぶ時を持ちたいと願います。

今日の本文に出ている姑ナオミと嫁ルツの家庭は、士師(さばきつかさ)時代、つまり、イスラエルの国にまだ正式に王もいなかったため、それぞれ自分の思いのまま行っていた暗い、混乱の時期でした。経済的にはイスラエルでは日照り(ひでり; 凶年)の続いたため、農作物(のうさくぶつ)の小作(こさく)も出来ず、食べ物がなくなり、家族が生き残るため、ナオミさん家族は自分たちの故郷であったユダ・ベツレヘムを離れ、「異邦の地モアブ」と言うところまで移住していた家族でした。

最初、この家庭は夫と妻ナオミ、そして二人息子4人家族で、故郷を離れ、遠い他国にまで来て、家族みんな頑張って働きました。二人の息子はモアブの女と出会い、結婚することも出来ました。これからもう安定して幸せな家庭となるだけだろうとナオミさんは期待したと思いますが、残念ながら、なぜかナオミの夫から、そして結婚していた二人の息子たちまで、次々と亡くなってしまいう悲しみ悲劇が家族に襲って来ました！夫も、息子たちも、家庭の中男性たちが全部亡くなる、きわめて耐え難い苦しい試練を経験されたこの家庭には女性しか残らなくなってしまいます。お母さんであり、しゅうとめであったナオミ、息子たちが結婚していたモアブの嫁のルツとオルパという3人の女だけが残ってしまう今まで想像したことのない、家庭の一番危機の状況に落ちていたことが分かります。

経済的貧しさや他国での生活の不便さや困ったことよりも、今まで何より愛し、家庭の絶対的に頼りの存在だった主人と息子たちが、その中一人だけでもなくなることは、到底耐え難い悲しみなのに、どちらが先だったのか分かりませんが、夫も、息子たち3人とも、全員が約束したかのようなみんな召されてしまったのです。当時女性だけで生きるのがとても厳しい時代の中、それとも他国で、これから女3人でどうやって生きることが出来るでしょうか。

心の深い悲しみと深い傷を抱えながら、さらに生活の困難の中陥られていたこの家庭が、幸せになることなんてもうはるかに遠くなってしまった話だと3人の女性の方は思っていたのではないしょうか。もう家庭自体が壊れる寸前だと言っても過言ではないでしょう。

どう見ても、このファミリーには希望が見えません。絶望に陥られ、不幸になるしかない家庭の状況でした。もう家では三人の未亡人になったしゅうとめナオミと、よめであったルツともう一人のよめオルパだけが生き残されている寂しい家庭であったのに間違いありません。しかし、この家庭は後には、そんな悲しみや苦しみがあってもそれを乗り越えて祝福された家庭として代々、伝えられて来ています。

今日の我々の質問はこれではないでしょうか。愛する家族を次々と失い、生活するのも大変で、きわめてひどい悲しみと苦しみを負い、傷だらけのこの家庭が、いったいどうやって、その試練を乗り越えて、祝福された家庭となったでしょうか。

### ①互いに深く理解し合おうとする家族

大切な主人と息子たちを他国で失った母ナオミは、故郷であるユダの地に神様がかえりみて下さって、凶作(きょうさく、ひでり)の時が終わったという知らせを聞きました。寂しい他国の生活で、すでに夫と二人の息子まで失ってしまい、疲れ果てていた母ナオミはもう故郷イスラエルのユダに帰ろうと決心します。その時、残されていた二人のよめたちはどうすべきかが問題でした。二人のよめたちはまだ全然若いし、子どももいなく、イスラエル人でもなかったので、

当然眞の神様を知らず、信じていかなかったモアブ出身の嫁たちでした。

**ルツ記1章6節以下**に注目すべき場面を見て見てください。

しゅうとめナオミは、よめたちの孤独を理解していたお母さんでした。私も未亡人として、これから一人で生かなければならないので、あんたたちもこれから同じくずっと一人だけで生きるべきだという固執（こじつ）のあるお母さんではありませんでした。

当時の風習としては、当然夫がなくなっても、残っているしゅうとめと家族として、一緒にしなければならなかったですが、他国のよめたちがしゅうとめの母国イスラエルについて行って生活すると、またナオミ自身が、今まで他国でもなう生活の大変さ、寂しさ、苦しみをだれより、母ナオミご自身がよく経験して、理解していたので、若いよめたちと一緒に連れて行こうとしなかったのです。

“私もそのような苦しみを経験したのだから、あなたも味わうべきだ。”とか、“私が今までこうだったから、あなたたちもこうやらなければならない”のように押さえつけようとしたり、強制的に願ったりしませんでした。ナオミは自分の家庭の不幸と悲しみを、よめたちに続けて押しつかけたり、無理やり一緒に味わわせようとしませんでした。神を知らないよめたちが我が家の嫁になったんだから、無理やり信仰を持てるように要求もしません。

むしろ、ナオミはイスラエルに戻る前に“あなたがたは、それぞれの自分の母の家へ帰りなさい。行って新しく人生を出発するように、新しく家庭を作って幸せに生きるように”と心から若い嫁たちをの違う状況と立場に立って深く理解しているナオミの姿が見られます。若い嫁たちに対し、温かく配慮し、尊重し、深く理解するすばらしいお母さんの姿ではないでしょうか。

本文の**13節後半**をみてください。「**主の御手が私に下ったのですから。**」この話はどういう意味ですか。不幸にあったこの家庭のよめたちに“よめたちよ。我が家の今の不幸はすべて私の責任だから、この苦しみは私まで十分だから、あなたたちのせいでは決してないから、自由になりなさい”という意味が含まれています。神様を信じなかった異邦の国のよめたちに、少しでも、恨みを持って、あなたたちのせいで、神様から罰せられたと言えるはずなのに、母ナオミはこの家庭の不幸と傷の原因と責任はすべて自分にあり、神様が自分を罰せられたと言っているのです。だから、あなたたちまで、これ以上苦しんでほしくないから、わたしから離れてももう自由になり、新しい人生を始めるように、深く配慮し、彼女たちの立場を理解してくれます。もちろん、事実、決して神様からの罰でもなく、母ナオミのせいではないでしょう。何とすばらしいお母さんの姿でしょうか。

そのようなお母さん、しゅうとめナオミだったので、よめたちも、そのお母さんを深く理解、尊重しているすばらしい姿も見られます。

**8節中**「あなたがたが、なくなった者たちと私にしてくれたように、主があなたたちに恵みを施して下さいますように」と暖かい配慮し、祝福して下さるナオミの言葉に、よめたちはも激しく涙を流しながら、“**いいえ。私たちはお母さんと一緒にお母さんの国に帰ります(10節)。**”と答えます。何と艱難と試練の中で美しい家族の姿でしょうか。独りになったしゅうとめのそばを二人よめたちは最後まで支えようとする姿です！今日、生んでくれた自分の父や母が、一人になってしまうと、子ども達たちさえ、忙しいとか、色々な理由をつけながら、顧みようとすらないのに、二人の嫁たちは、自分のお母さんように、いやそれ以上に心からしゅうとめを心配し、深く理解しながら、寂しくならないように、支えようとするすばらしい嫁たちの姿です！

私はこのナオミさんの家庭を“**お互いに向かって理解の窓が開いている家庭**”だと言えると思います。愛する信仰の家族のみなさん、現代の家庭の一番の問題と悲劇は、「**会話の断絶、理解の断絶**」にあると言えるのではないのでしょうか。同じ屋根（やね）の下で、同じ生活の空間に住んでいる家族なんだから、自動的に、当たり前理解できるとは言えません。お互いの今の心、心境、状況や立場を理解しようとする努力なしにはできません。

そのために、心を開いた本音（ほんね）会話、トークの時間が絶対必要です。身近にいる関係だからこそ正直な分ち合いが必要でしょう。

最近、みなさんの家ではどれくらい会話があり、どれだけ理解しあって生活をしていますか。夫婦の、親子での会話の時間(情報交換ではなく)をよく保っているでしょうか。まず、そのような心の理解がなければ、お互いのための暖かい配慮が出来なくなります。

姑(しゅうとめ)は嫁たちが、全然自分を理解してくれないんだと、嫁たちはしゅうとめが自分を全然理解してくれないんだと、夫が、妻が、子どもが、それぞれみんな自分を理解してくれないんだとばかり訴えていながら、お互いを先に深く理解して見ようと努力してない時があるのではないのでしょうか。一番愛し合うべき、理解し合うべき、温かく配慮しあうべき家族関係なのにもかかわらず、お互いが自分をまったく理解してくれないことに不満を持っていますが、それは順番が間違っています。しゅうとめナオミがまず、若い嫁たちを先に同情しつつ、深く理解してあげています。きっと日常生活の中、若い嫁たちをよく理解しようと努力し、温かく配慮したため、若い嫁たちも、一番悲しみ、さびしく

なっているしゅうとめを自分のお母さんのように、理解し、一人にさせようとしなかったことを覚えてみましょう。すなわち、まず、自分が日頃理解してあげようと、温かく配慮してあげようと努力しなければなりません。

そうしてもらいたいなら、自身がまずそうしなければなりません！それが、イエス様が教えて下さった関係の黄金律であり、大原則であることを我らは忘れてはいけません。「(マタイ7:12) ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。」

この時間、生きておられる神様の御前で正直な告白として、実は、自分が理解できないのではなく、もっと他の家族の立場になって、気持ちになって、もっと深く理解しようともせずに、自分のことばかり理解してほしいと要求し、求め続けて来たのではなかったのか共に振り返って見たいと願います。

だから、みなさん! 理解(understand)というのは本来「相手の立場の下に立って考える」という意味から派生した単語なのです。正しい理解しようとする姿勢は、妻は夫のことを、夫が妻のことを、親が子どものことを、子どもが親の立場と心を、上の目線からではなく、下に立ってその気持ちと立場を考えて上げることが出来ますように祈ります。

幸せな家庭はお互いを先に理解しようと努力し、配慮する家庭だと信じます。 幸せな教会も同じく(大人は子どもたちを、夫たちは妻たちを、若い青年たちは年寄りの方々を、信徒が牧師を、牧師が信徒の立場になって)理解し合う教会ではないでしょうか。自分の思う通り、願い通りにならないと叫んでいるため、家族が傷つき、教会が分裂され分離を経験します。みなさんはどれだけ自ら理解しようとしていますか。不幸の連続の中であっても、この母ナオミとルツの家庭はお互いをまず深く理解し、温かく配慮しようとする愛と信頼の土台がありました。この理解があったからこそ、苦しみと悲しみの中でも乗り越えられ、幸せな家庭になれると信じます。

## ②人生の全てをともにする家族

本文16節で嫁の一人ルツは続けてこのように告白します。

「お母様が行かれるところに私も行き、住まれるところに私も住みます。」

みなさん。これを単に寝るところだけを同じくすることばで理解してはいけません。一緒に行き、一緒に住むということは場所の事だけではなく、人生のすべてをも一緒にするという告白の意味なのです。今日、親も、子どもたちもみんな忙しく一緒にする時間がなかなか少なくなっています。家庭内に心や生活の分ち合いもありません。私たちはどれだけ家族との会話、もしくは分ち合いがあるのでしょうか。

愛するみなさん! 夫であるみなさんはどれくらいみなさんの妻と一緒にする時を過ごしていますか。親であるみなさんはどれだけみなさんの子供たちと一緒にする時間を過ごしていますか。子どもなるみなさん! みなさんはみなさんの親とどれだけ一緒に時間を過ごしていますか。「一緒にする」というのは、ただ同じ空間や場所にいることではなく、独りぼっちのように寂しくさせない、正直に共に心を分かち合い、共に祈り合う、心の通じ合うことを意味します。

今日の家族の姿は、残念ながら、夫たちは夫なりに、妻たちは妻なりに、子どもたちは子どもなりに、年配の方々はご自身なりに、みんな寂しいとよく訴えている時代になっているのではないのでしょうか。家の中に一緒にいても、なぜかばらばらに、別々になっているような気がします。食事を食べる時にも、ベッドで夫婦と一緒に横になっても、スマートフォンで、テレビでまったく会話もなく、家の中家族がずっと別々、ばらばらになっている家族が意外と多いのではないのでしょうか。例え) 7年前、妻のことば

今日の最大の家庭の問題の発端(ほったん)はりっぱな家は増えて建てられていくいっぽうですが、アットホームや笑い会話が多い家庭は益々減っていく事だと言われていました。

今日母ナオミさんや嫁であったルツの家族にはりっぱな家はありませんでした。しかし、彼女らには、耐え難い悲しみや苦しみがあっても、よく耐え、乗り切ることが出来たのは、人生のすべてを最後まで共にし、一緒にし、喜びも、悲しみも、ともにしようとする家族だったからです。

我々はみんな忙しいです。忙しい時代に生きています。そのためお互いに、最近何を考えているのか、どんな悩みがあるのか、正直に、心にあるものを話し合い、会話する時間は週に一回あるかどうかで、一緒に時間を過ごす事もイベントのようになってしまっています。なので、優先順位をしっかりと立てて、計画的に、意図的に、テレビやパソコンや、スマートフォンを消して、家族と向き合い、一緒にする家族の大事な時間を保っていかなければなりません。

せっかく家族が集まっているのに、生活の悩みや、最近感じたことや思い、祈り課題などを分かち合い、励まし合うことを大切にしましょう。むなしくテレビや、携帯に捕らわれないように気をつけましょう。

ある有名なクリスチャンの敬虔な学者がこのように言いました。

“祈る人がともにとどまることができ、一緒に楽しめる人が一緒にとどまることができる。”

愛する信仰の家族のみなさん、祈りはお互いが正直な分かち合いが出来るものであります。みなさんは家族と一緒に祈る時はありますか。家族と一緒に楽しんでいる家族の時間はいつでしょうか。みなさんは当然家族の幸福のため頑張っ

仕事をやっていると思います。そうであるなら、家族の幸福のためにも祈ること、ともに楽しむことも大切な要素である事を忘れないようにしましょう。

ナオミとルツにはりっぱな家はありませんでしたが、彼女らは家族として、悲しみも、心もともに分かち合い、人生をともにしようとする心と関係を保ったため、悲しみも、苦しみも乗り越えることができたと思えます。

聖書の本文16節に嫁であるルツの告白を聞いてみてください。

**「あなたの民は私の民、」**

**ルツは主人の家族と自分の家族を分けようとしませんでした。**ルツは主人のお母さんを自分のお母さんとして告白しています。“姑”とつけていませんでした。**ルツはご主人のお母さんであるナオミを自分の母として接しているのです。**もし、我々が自分の愛するご主人や妻の親を自分の母、自分の父として受け入れ、接するのなら、我々の家庭はさらに和睦で、祝福された家庭、家族に変わると信じます！

**私は今日、多くの家庭の悲劇は旦那の家族、妻の家族を分けることから始まる**と思います。

今日の御言葉として家族は少なくともただみなさんの旦那、妻の両親も含めてであることを忘れてはいけません。

残念ながら、こんにち、特に若い家族の特徴の一つは、**個人主義が流行っていることです。**つまり、家族の中さえも、警戒の線を引いています。結婚しても“あなたの母、あなたの父、あなたの兄弟！わたしとは関係ない！”当然のように分けてしまいます。それは夫や妻は、あなたの家族の事だから、私と関係のないことかのように、夫婦さえも、寝るのも部屋別々で、給料の管理も、通帳も別々で、特に、夫の家族の両親はもっと大切に、嫁の両親にはその後かのように後回しにしたり、プレゼントをする時も、旦那の親には高いやつをすべきなのに、妻の親のところは適当にしようとしたり、そのような家族に対して同じではなく区別したり、差別したりすることで、夫婦関係の中葛藤が深刻になってしまう一つの原因となっているのではありませんか。

聖書にしたがって、自分の旦那を自分の体のように愛するなら、主人が愛している彼の母をも自分のように愛することができます。自分の妻を自分の体のように愛するなら、妻が愛している妻の母を、妻の父も自分の親のように愛することができるのではないのでしょうか。人々が自分で作りあげた絶対わたれないと言っているこの境界線を乗り越えて、あなたの父、あなたの母を自分の父、自分の母として家族として受け入れるべきだと思います。

ある心理学者はこんにち結婚する新婦（しんぶ）たちの心にある一番危険な考えの一つは姑像（しゅうとめぞう）だと指摘します。つまり、**多くのよめたちになるの心に、姑(しゅうとめ)を怖い存在、近くにしてはいけないとして警戒すべき存在、出来るだけ関わらない方が良いかのように決め付けてしまう意識**がどこかにあるということです。しかし、実際多くのよめたちの不幸は姑から来ることより、**姑(しゅうとめ)に対する自分の偏った思いのため**であるという指摘は考えて見る必要があると思います。今日、聖書にはナオミや嫁たちを、娘たちとして受け入れ、関係を保ち、ルツも若いころに旦那をさきに亡くしたのにもかかわらず、**姑となる区別しようとしたり、分けようともせず、ナオミに告白している嫁のルツの告白には、こう告白しています。“お母さん、あなたの民が私の民です。”**

### ③信仰を立たせ祝福されていく家族

続いているルツの告白を聞いてみてください。**「あなたの神は私の神です（16節）」**家庭内で信仰の一致はすべての一致をもたらします！**信仰というのが自分の人生の多くのパズルの中でごく小さいパズルにすぎないなら、単なる趣味の活動見たいに時間がある時だけ、信仰生活をするぐらいなら、信仰は家族で別に一致しなくてもかまわないかも知れません。**しかし、みなさんにとって信仰はどんな意味を持っていますか。

**真の神を信じるこの信仰を通してまことの自分の自我が作られ、この信仰を通して、世を見る世界観や何が大切なのか価値観が決まり、この信仰を通して、自分が何のために生きるのか、その生き方と、人生の目的を、死と永遠の問題に対する備えにまで全部繋がっているなら、信仰は人の人生のすべてを左右するほど大切ではありませんか。**

現代の家庭の悲劇の一つは**精神的、霊的分離にあります。**みなさんは**家族が集まると神様のことや聖書の話し、信仰の分かち合いなどをしていますか。**今日の説教が長かったとか、教会のだれだれはこうした、ああした。とのネガティブな話しではなくですね。みなさんは、聖書を通して教えられたり、悟られた話とか、最近祈りが応えられたことなどについて分かち合い、自分の信仰の悩みを打ち明けて分かち合うことを家庭でやってことはいつでしょうか。

教会の家族同士でも集まってはショッピング、政治、冗談の話ばかりの意味の無い話ばかりするのなら、残念なことではないでしょうか。**幸い、我らのクリスチャンプレイスチャーチでは家の教会があり、毎週各牧場の家族が共に信仰を持って、共に悩みを分かち合い、共に祈り課題分かち合う時をあることは何と幸いなことでしょうか。**

初代教会の信徒たちは毎日集まっても時間が足りなかった見たいです。それで、夜遅くまで一緒に食事しながら、愛するイエス様の証をしたり、お互いのために祈る合い、交わりあう時間を楽しんでいたからでした。

**事実嫁であったルツの勇気は今まで自分が信じた宗教ではなく、創造主の真の神を知り、信じた信仰の一致への決断があったため、家族がばらばらになりそうな危機の時を乗り越え一つになり、神に祝福されていたのではないのでしょうか。**

本来、ルツはモアブの偶像のいろんな神々を信じていた異邦の女ですが、新しい家庭に入り、家族を通して、特に姑ナオミの生きた信仰の姿と生き様、生き方を見て、生きておられるまことの神様の存在を知り、一緒に経験して来たはずです。それでついに嫁ルツは“**お母さんの神様は私の神様です。**”と告白するようになりました。

我々、クリスチャンが愛する家族に与える最大の寄与（きよ）は何だと思いませんか。信仰の遺産だと信じます！子どもや家族に残せる最高の遺産は何でしょうか。親がちゃんと信仰生活、信仰の生き方、神の御言葉と祈る生活、教会での礼拝をどれほど大切にしていたのかその模範を遺産として子供たちに見せて、私の神様が子供たちの神様ともなるように導くことではないでしょうか。家族や子供たちに実際日常の生活の中真の神様が生きておられ、今も我らを助けて下さることを、祈りに答えて下さることを、実際守り、導いて下さることを証しすることであり、信仰の力と恵みを見せて共に経験させることだと信じます。

自分たちの愛する子どもたちに、なくなるお金を残してあげるのではなく、**永遠に変わらないこの信仰を遺産**として残すべきでしょう。自分が一生涯、頼って来た神様、自分が毎日涙をもって祈って来たその神様を伝える母になろうと決断しようではありませんか。

家の家族が夫から息子たちまで次々と倒れなくなる悲しみと衝撃の中で、ナオミはいくらでも信じて来た神を恨んだり、つぶやいたり、だれかのせいにして、うらんだり、がっかりする姿を見せることができるのにも関わらず、どこにもそのような戸惑ってたり、揺らいている信仰の姿はナオミにはありません。ただひたすら人が生きるのも、死ぬのもすべて全能なる神の御手にある事を認め、後の残りの人生をイスラエルに戻って神にすべて委ね、信じ従おうとするしゅうとめナオミの真の信仰の姿が見られます。きっとルツも感動し、そのお母さんが信じ、仕えている神様こそ、間違いではなく真の神であると確信して、自ら信じようと決心したと思います。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！9節ではルツとオルパ人とも声をあげて泣いていましたが、しばらくしてオルパは姑ナオミに別れの口づけをしています。**14節**をみると結局、二人中もう一人の嫁であるオルパはナオミから離れて、違う方向の道へ離れて行ってしまいます。二人の中ひとり嫁オルパは結局、神の祝福される家庭をあきらめて離れてしまいましたが、嫁ルツは姑にすがり実際最後まで姑と一緒にしようとしていただけではなく、この信仰の決断を通して、これから残りの人生すべてを姑とともにしようとしています。“**あなたの神は私の神にもなります。**”つまり、これからただ一緒に暮らすだけではなく、信仰の家族となることを決めました。

ともに同じ神様を信じ、ともに祈り、ともに神様の御言葉を分かち合い、ともに神様から与えられた恵みと感謝を分かち合う家庭はどんな試練にあってもそれを乗り越えて祝福される家庭となる事を今日のルツ記の御言葉我々に教えて下さっています。

**17節**を見ると、嫁ルツはお母さんナオミにこのようにまで告白します。“**あなたが死なれるところで私も死に、そこに葬られます。**”これはお地上で死が我々を分かちまで時まで一緒にするの**運命共同体**であることを告白しています。

愛するクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさん！信仰の家庭は“**それゆえ、男はその父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである**”（創世記2:24）この御言葉通りに信じて生きます。

すでに自分たちの中で**分けようとする**ことは家庭の悲劇の潜在性（せんざいせい）を作っておくことになるからです。聖書はこう語っています。“**そして、『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである』**と言われました。6ですから、**彼らはもはやふたりではなく、一体なのです。そういうわけで、神が結び合わせたものを人が引き離してはなりません。**（マタイ19:5-6）”これをどんな形でも分けようとする行動は認められません。

17節の感動的ルツがしゅうとめナオミに告白をもう一度覚えながら今日のメッセージを終わらせたいと思います。“**あなたが死なれるところで私は死に、そこに葬られます。もし、死によってでも、私があなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰して下さるように。**”

**信仰の家族は、どんな悲しみや不幸があっても死以外は我々の家族を引き離すことができないという愛と責任ある告白**ではありませんか。我々の家庭もともに分かち合い、そして死が我々を引き離すその時まですべてをともにする家庭となりますように 神の祝福をお祈り致します。ついに、ルツは異邦の女だったのにもかかわらず、神様を信じ、信仰と愛を持って家族を大切に守っていた信仰の彼女から、後代（こうだい）にあんな偉大なダビデ王が生まれ、そして神の御子イエスキリストが来られる信仰の名門となる祝福をいただきます。

今日のこの美しい信仰の母であったナオミと信仰の嫁となったルツの姿が我々の教会の母たち、よめさんたち、姉妹たちのみなさんとなり、もしこれからどんな苦しみや悲しみがあっても、愛と信仰によって乗り越え、同じ神の祝福を経験するご家庭となりますように救い主イエスキリストの御名によってお祈り申し上げます。アーメン！

#### <祈り>

父なる神様！これからも共に分かち合い、共に祈り合う家庭となりますように。傷と寂しさの中に置かれている家庭があるなら、主よ、助けてくださって、その傷を癒し、回復させてください。祈る母たちとなるようにさらに健康と信仰と愛と力をお与えください。我々クリスチャンプレイズチャーチに集っているすべての家庭がさらに祝福され、小さい天国を味わう祝福の源となる家庭になりますよう主が助けてください。愛する主イエスキリストの御名によってお祈り申し上げます。アーメン！